

第25期第12回常任理事会議事録

日時：平成元年11月7日 17:30～19:30
 場所：那覇市 パシフィックホテル沖縄
 出席者：浅井，岡村，松野，安田，中村，村松，村上
 菊地，武田，瓜生，石島
 オブザーバー 新田，大城

議事

A. 報告事項

1. 第25期第11回常任理事会議事録は一部修正の上承認された。

2. 各委員会報告

「庶務」主なものは次の通り

- ・研究発表会などの案内 5件
- ・共同研究公募 1件
- ・気象研究ノートの入札を行った。(3業者参加)

「会計」

9月の収支について報告があった。

「天気」

10月号の内容および11月，12月の予定について報告があった。

「気象集誌」

パソコン通信は「天気」9月号に紹介記事掲載後，活発化した。

その中で文献検索についての問題提起があり，今後検討して行くことになった。また，松野理事から論文検索の国際機関に気象集誌が送られているか質問があった。後日調査の結果，

Institute for Scientific Information

3051 Market Street

University Center Philadelphia 19140 U.S.A.

に送付されていることが判明した。

「教育と普及」

- ・今年の夏季大学の報告があった。来年のテーマとして「大気と海洋相互作用」が候補になっている。
- ・気象談話室の改善について委員会検討を予定している。

「IAMAP-93」

理事長より，1993年の第6回 IAMAP 総会が日本で開催されることが正式に決まったとの報告があった。また，現在までの気象学会の取り組み状況についても説明があった。

「AGU」

1990年1月

理事長から1990年8月21日から25日の間，実施される国際地球物理金沢会議について概要が報告された。(案内は「天気」12月号に掲載の予定)

B. 審議事項

1. 会員の新規加入

新規加入4名が承認された。

2. 第26期役員選挙の選挙管理委員長について

選挙管理委員長を山岸米二郎会員(気象庁予報課長)に委嘱する案が理事長から提案され了承された。規約に基づき所定の手続きをとることになった。

3. 気象集誌の印刷について

村上担当理事から気象集誌の現行の印刷密度300DPIを1200DPIに変更すること，および紙質を良くすることについて提案があった。審議の結果，印刷密度向上については今年度の予算の範囲内のできるもので，次号から実施することになった。紙質については平成2年度予算案に計上することを検討する。

4. 気象研究ノートの印刷について

庶務担当中村理事から，気象研究ノートを電子出版方式で発行する場合の紙面の見本刷り，価格面その他について，現行方式との比較が提示された。審議の結果見本刷りでみた紙面の出来ばえは優劣がない，価格が安くなるなどから，常任理事会では採用の方向で編集委員会に技術的な面の検討を依頼することになった。

5. 「山本・正野論文賞」のメダルについて

第11回常任理事会で検討された案が提示され，審議の結果案どおり，現行の「山本賞」の図案だけを採用することが承認された。

6. 故堀内会員の追贈寄付金の運用について

審議の結果，当面，IAMAP-93の活動の準備資金として運用することが承認された。また，最終的には国際学術交流基金に繰り入れることが認められた。

7. 会員の種別と会費の改訂案について

庶務担当中村理事から案について説明があり，大筋において改訂することについて賛成の意向が示されたが改訂案中の維持会員と，「集誌」のみ購読の外国人会員の扱いについて疑義が出され，次の常任理事会に修正案を提出すること

にした。

8. 平成2年度の予算案・事業計画案および平成元年度の事業報告案について

庶務担当中村理事および会計担当の村松理事から資料に基づいて説明があった。今後継続的に審議を続けて行くことになった。

(p.60からつづく)

(サウンダー使用)：各チャンネルの輝度データ温度を使用して算出する。

持ち上げインデックス(サウンダー使用)：500mbの気温等と比較して安定度のインデックス(Lifted Index)を計算する。

層厚(サウンダー使用)：数値予報モデル出力の高度データと(衛星による)鉛直温度プロフィールで計算する。

温度風プロフィール[傾度風](サウンダー使用)：層厚の計算値から1°格子、地表～100mbまでの傾度風を算出する。

マン・マシン法による水蒸気解析(イメージャ/サウンダー使用)：可視/赤外の雲パターン解析をベースにして、海上に水蒸気プロフィールをあてはめる。水蒸気プロフィールは13種類で、6レベル、2.5°格子の値が1日4回出力され、数値予報への入力データとなる(筆者現在も行われている)。

降水量推定(イメージャ使用)：現業的な手法(Scofield-Oliver法)で算出し、洪水予報に利用する。出力図はAFOSシステムにも流される。

4. 海面パラメータ

五大湖の水解析(イメージャ/NOAA衛星のAVHRR

使用)：海軍と海洋大気庁の合同海水センターで、12～4月の週3回(月、水、金)実施。内容は、氷の領域、密接度、厚さ、水路。画像データに加え、カナダの飛行機観測や地上観測を使用する。結果はテレファクスで通知され、氷域予報、沿岸警備、船舶、調査に利用される。

5. データベース

保存データ：画像、サウンダーデータ、キャリブレーションデータ等を保存する。

6. 衛星風

雲移動風(イメージャの11.2μm使用)：現行のGMSの風計算の方法とほぼ同一と思われる。

水蒸気風(イメージャの6.7μm使用)：アルゴリズムは雲移動風と同じだが、1時間間隔の画像を使用する。風ベクトルデータへの高度値設定方法は現在研究中。

DLM風(イメージャ/サウンダー使用)：DLM(Deep Layer Mean)風は熱帯低気圧の指向流として有効である。上記の衛星風データ、サウンダーの傾度風、およびゾンデ等の高層風データを用いて計算される。

編集後記：編集委員となり、そろそろ1年が経とうとしています。「シンポジウム」を担当していますが、執筆依頼に不手際があったり、関係される諸氏にはご迷惑をおかけしました。この場でお詫びを申し上げます。

毎月1回、気象庁内の会議室で「天気」の編集会議が開かれます。会議に出席すると、「天気」をよりよいものにするために、いかに各編集委員が真剣に考えているかわかります。

よく、岸保先生の「数値予報新講」が例として出され

るのですが、「内容」も充実させ、しかも読者に広く興味をもってもらう本にするためにはどうすればよいか、自分自身では「天気」はその目標を満足しているのではないかと思うのですが、そういった意見はあまり聞かれません。

掲載論文の内容から印刷方法、体裁まで、会議ではなごやかな中にも、ある緊張感を保ちながら討論が続けられます。

(禎)